



特定研究プロジェクト1 2004年度第3回研究会

日 時 / 2005年3月3日(木)
会 場 / 同志社大学 今出川キャンパス 扶桑館CISMOR会議室
発 表 / ドロン・コヘン(同志社大学神学部嘱託講師)

スケジュール

1:00~2:00 発表:ドロン・コヘン
「反セム主義 ―ヨーロッパにおける歴史的背景と現状」
2:00~2:10 休憩
2:10~3:20 ディスカッション

研究会概要

「反セム主義」(Anti-Semitism)とは近代に入って生まれた用語である。しかし、そこに反映されているのは、ユダヤ人に対する憎悪という古くからの現象で、この憎悪は他の民族に対して「普通に」向けられる感情を超えており、神学的、または人種的な論拠に基づいてユダヤ人の生存権すら否定しようとするものである。本発表ではまず、反セム主義のルーツを確認し、キリスト教世界とイスラーム世界における数例を取り上げて手短に紹介し、続いて今日のヨーロッパにおける状況を概観する。

その起源

ユダヤ人の起源は古い。しかし、反ユダヤ的感情が表れてくるのはヘレニズム時代からである。当時としては異質な唯一絶対神信仰をもつことから、ギリシャ的ではなかったのである。そのような感情が歴史上初めて表れたのは紀元前2世紀の時代で、ギリシャの一般的な宗教行事への参加を拒むことから、ヘレニズムの拡大にとって邪魔な存在だと見なされたのである。

キリスト教世界において

キリスト教世界におけるユダヤ人の境遇は劣悪なものであった。キリスト教がローマ帝国の国教になると反ユダヤ的法律が施行され、中世においてもいくつかの国々でユダヤ人は国外追放されている。18世紀の啓蒙主義時代になるとようやく変化がみられ、それが19世紀における「ユダヤ人の解放」となった。またその一方で、新しい「反セム主義」が誕生し、ドレフェス事件などを契機としてシオニズム運動へと向かうことになり、人種差別的反セム主義の台頭は、最終的にナチスドイツによるホロコーストという最悪の結果となる。

イスラーム世界において

クルアーンにもユダヤ人を非難する記述は含まれているものの、キリスト教徒と同様に「経典の民」という特別な地位が与えられている。また、キリスト教世界ほどユダヤ人が嫌われるということもなかった。しかし近代においては、ユダヤ人への態度は徐々に変化し、ヨーロッパにおける反セム主義が飛び火する形でアラブ世界にも波及していった。

ヨーロッパにおける現状

現在、ユダヤ人は約1300万人おり、そのうち約100万人がヨーロッパに在住している。残念ながら反セム主義的事件は、ホロコースト以後も起こり続けてはいるものの、また一方で和解に向けた努力もなされている。また、イスラエルの問題と反セム主義との混乱が生じてもいる。近年ではヨーロッパ在住のムスリムにおいて反ユダヤ主義が多いとの報告もなされている。その中でも、ユダヤ人とムスリムとのよりよい共存に向けての努力もなされている。このような多くの努力によってのみ、新たな平和的共存の時代が訪れるであろう。

(神学研究科博士後期課程 横田 徹)

反セム主義：その歴史的背景と ヨーロッパにおける現状

同志社大学神学部嘱託講師
ドロン・B・コヘン
Doron B. Cohen



「反セム主義」とは近代に入って生まれた言葉であるが、そこに反映されているのは、ユダヤ人に対する憎悪という古からの現象である。この憎悪は他の民族に対して「普通に」向けられる感情を超えている。それは、神学的、または人種的な論拠に基づいてユダヤ人の市民はもとより、生存権まで否定しようとするものなのである。本論ではまず、反セム主義のルーツと歴史を膨大な資料の中から数例を取り上げて手短に紹介し、続いて今日のヨーロッパにおける状況を概観する。

古代

旧約聖書には、ユダヤ人(当時は「イスラエルの民」と呼ばれていた)に多数の敵がいたことが描かれているが、特別な反ユダヤ感情の存在は示されていない。そうした感情が最初に現れるのは、ヘレニズム時代のことである。アレキサンダー大王の支配下となった地域に、ヘレニズムと呼ばれる新しい文化が誕生した。これは領内の諸民族の信仰と習慣を融合し、ギリシアを源流とし、ギリシア語を媒体とする文化である。古代ユダヤにおいて、エルサレムを中心に一部の上流階級がヘレニズムの文化に染まっていたが、しかし、大多数を占める田舎の農民達は伝統的な文化を守り続けていた。彼らはトーラーの戒律に従い、ジェンタイル(非ユダヤ教徒)の宗教行事に参加することも、彼らの神々に生贄を捧げることもしなかった。自分達の信じる唯一の神以外の存在を認めようとはし

なかった。また、異教徒との結婚も原則的に拒んだ(ここで特記すべきは、古代において、ある民族が他民族の神を自分たちの宗教に取り込み、自分たちの神と同じ存在と見なしたり、あるいは他民族の神に敬意を表したりすることは、決して珍しくなかったということである)。ここからは二重の問題を見て取ることができる。一つは、ユダヤ人が唯一絶対的な神を信仰していたということであり(唯一神は後にキリスト教およびイスラームのトレードマークにもなるが、当時としては異質であった)、そしてもう一つは、彼らが信仰に基づく民族的アイデンティティの維持に努め、他民族との結婚については、信仰と民族的独自性の損失につながるものとして恐れていたということである。ジェンティールのユダヤ人に対する反感は、ユダヤ人が閉鎖的な民族であるということに由来する。つまり、外部との接触を拒み、自分たちの聖地に異教の神が入り込むことを冒涇と見なす態度が問題視されたのである。

反セム感情が歴史上初めて深刻な形で噴出したのは、セレウコス王朝のアンティオコス・エピファネス(紀元前175-164年)の時代においてである。アンティオコスはユダヤ教を集中的に攻撃したが、それにはエジプトのプトレマイオス王朝との対立という政治的な背景に加え、文化的な背景もあった。ギリシアの一般的な宗教行事への参加を拒むユダヤ人は、ヘレニズムの拡大にとって邪魔な存在だと見なされたのである。アンティオコスは、エルサレムのユダヤ神殿をゼウス神殿に作り変えるな

ど、強引な方法でギリシアの宗教の拡大に努めた。結果として、マカバイ(あるいはハスモン)の反乱が起こり、ユダヤ人はローマ支配が始まるまでの僅かな期間ではあるが、独立を享受することとなった。同じ頃、エジプトの言い伝えに基づいて、ユダヤ人に対する新たな非難が起こった(ユダヤ人に関する言い伝え、または作り話が、やがて疑問の余地のない真理として受け入れられてゆくという現象は、歴史上何度も起こっている)。その言い伝えは旧約聖書の「出エジプト記」の内容を逆にしたものであった。すなわち、ユダヤ人はハンセン病を患った、あるいは穢れた民族であるとの理由からエジプトを追われたのであり、その後もその不浄さゆえに孤立を守り続けた、というものである。ユダヤ人が排他的な宗教を確立したのもそのためであるとされる。更に、ユダヤ人は現在の居住地についても、その他の土地についても、正当な権利を持っていないとされた。早くもここには、人種差別的な見解が見られる。つまり、第一にユダヤ人の身体的特徴が問題とされ、信仰については二次的になっているのである。ここにはまた、ユダヤ人は自分たちの国を持つ権利がない宿無しの放浪者(「彷徨えるユダヤ人」)という見解の発端を見ることができる。

ローマ時代にもまた、衝突の新たな火種が登場した。ローマ人にとって、皇帝崇拝は宗教的義務に勝る国民的義務であったが、ユダヤ人はこれを拒んだのである。このことは、ユダヤ人は他の人々にとって重要である事柄に対して、少しも敬意を払わないという確信を異教徒の間に広めた。しかし、ローマ人は、エルサレムに皇帝の像を建てることまでは強要しなかった(例外的に、カリギュラが自身の像の建立を望んだことがあったが、それを主張する前に本人は暗殺されてしまった)。ローマ帝国人口の約10パーセントを占めたユダヤ人は、領土内の全域で暮らし、住居や職業に関して制限を課せられることもなかった。これは後の

キリスト教世界における状況と大きく異なる点である。更に、ユダヤ人は安息日などの宗教行事を維持する特権も保持していた。しかし、この状況は紀元前1世紀頃に一変する。この際も、エジプトが発端となった。ローマ支配に対する反乱がアレクサンドリアを中心に起こり、それがユダヤ人に対する暴動へと発展したのである(これが恐らく初めての「ポグラム(大虐殺)」であった。ローマ皇帝クラウディウスはユダヤ人の特権を改めて保証することを布告したが、一方で、他民族の信仰にも敬意を払うようにユダヤ人に対して要求した)。その後、ギリシア人によるユダヤ人批判が盛んになった。その内容は、従来の中傷を寄せ集めたものである。すなわち、ユダヤ人はハンセン病を患った不浄な存在であり、彼らの習慣の幾つかはそのことに由来しているというものである。エルサレムのユダヤ教神殿が外国人禁制であるのは、そこで人間の生贄が捧げられているからであるとも言われた(これは後にキリスト教徒がユダヤ教徒による儀礼的殺害を批判したことを予期させるものである)。紀元70年、エルサレムの神殿がローマ帝国によって破壊されると、ギリシア人は、このことは神がユダヤ人を嫌っている証であると主張した(これもまた、後のキリスト教徒による非難を予期させるものである)。エジプト人、およびシリアのギリシア人によるこのようなユダヤ人への非難は、その後、タキトゥスなどによって、ローマ文学の中で再生されることになった。

ここで、キリスト教とほぼ同時期に発展した、グノーシス的宗教にも触れておくべきであろう。グノーシス主義によれば、ユダヤ教は諸悪の根源とされる。グノーシス主義は二元論的宗教であるが、その世界観によれば、デミウルゴスという邪悪な力がこの世を創造し、トーラーとして知られる邪悪な知識をユダヤ人に授けたことになっている。一方で、この世にはギリシア語で「グノーシス(gnosis)」と呼ばれる善なる力に属する知識も存在し、これは選ばれた



人々にのみ明かされるとされている。グノーシス主義は紀元後の数世紀にわたって栄えたが、キリスト教の拡大に伴って衰退した。しかし、その思想は、紀元1000年以降、キリスト教の浸透したヨーロッパで再び登場した(特に、南フランスのカタリ派とアルビ派において)。世界を絶対的な善と悪に二分し、ユダヤ人に悪の役割を与えたという点で、ナチのユダヤ観(および世界観)もまた、グノーシス主義の一形態と言えるだろう。それ故に、ナチズムの理論と実践によると、ユダヤ人に対する闘争においては妥協が許されないのである。悪は完全に滅ぼされねばならないからである。

キリスト教世界

キリスト教世界におけるユダヤ人の境遇は、異教徒の世界における境遇と比べて劣悪なものであった。キリスト教徒にとってユダヤ教を受け入れ難くしていた理由は様々である。その中でも、最も基本的なものとして、救済に関する考え方の差異がある。これは現在でも二つの宗教を根本的に隔てる要素とされる。キリスト教徒は、イエス・キリストの到来により救いは成就したと信じるが、ユダヤ教は、この世界は未だ救われていないと考え、メシア、すなわち、救世主の到来を待望している。キリスト教も、ヘレニズム世界における場合と理由は異なるにせよ、同じくユダヤ人は神から嫌われているという考えに基づいて反ユダヤ的なヘレニズムの非難を取り入れた。キリスト教世界のユダヤ人は徐々に権利を剥奪され、やがて、そのほとんど全てを失った。キリスト教国の多くが、ユダヤ人の居住を禁じ、ユダヤ人は他国のゲッターで暮らすことを余儀なくされた。また、土地や畑を所有することも許されなかった。

キリスト教の文献におけるユダヤ人の描写は、元来、キリスト教がユダヤ教の異端的な一宗派であったという観点において見られるべきであろう。

歴史的に最も新しい二つの福音書であるマタイとヨハネによる両福音書は、キリスト教における反セム主義の二大テーマを含んでいる。ユダヤ人は、神の子が十字架に掛けられたことに対して集団的責任を認めさせられ(マタイ27章25節)、そして邪悪な力と同一視されているのである(ヨハネ8章44節)。原始キリスト教会は、自らを真のイスラエル、「魂によるイスラエル」、神の契約を受け継ぐ者であると宣言したが、その際、「肉によるイスラエル」を非難する必要があると考えた。神がユダヤ人を追放し、その愛をキリスト教徒に向けたことを証明することが必要だったのである。それ故に、キリスト教における反セム主義は旧来の異教徒の反セム主義を取り入れはしたが、当初からそれは質的に明らかに異なるものであったのだ。教会教父、特にギリシアの教父は、上記の福音書における主張を発展させ、イエスへの愛と、イエスを迫害した者を憎むことは同じであると説いた。それ故に、ユダヤ人を光の敵、神の子の敵と見なす初期キリスト教の態度は、グノーシスの宗教にある程度の影響を受けているとも考えられる(ナグ・ハマディ文書は、前キリスト教的グノーシス派の存在を明らかにしている)。

キリスト教がローマ帝国の国教になると(321年)、反ユダヤ的な法律が徐々に施行された。もっとも、帝国の急速な解体によって、そうした法律の一部は中世後期まで施行が延期されることになったのであるが。聖アウグスティヌスなどが展開したキリスト教思想として、ユダヤ人の残存には、キリスト教の真理に対する「証人」としての有用性が認められる、というものがある。ユダヤ人は自身の屈辱を通してキリスト教会の勝利を示すということである。これは一般的なモチーフとして宗教芸術に導入された。今でも、多くのヨーロッパの教会や聖堂の壁には、「エクレシアとシナゴーガ」という、二体一組の女性の彫像が飾られている。キリスト教会を意味するエクレシアが勝ち誇った表情を見せて

いるのとは対照的に、ユダヤ教を意味するシナゴーガは屈辱を受け、目隠しをされている。後者は、真理の光を見ることができない者として描かれているのである。

ヨーロッパのユダヤ人を取り巻く状況は、第一回十字軍遠征(1096年)を境に一段と悪化した。聖地の解放に向かう道中、十字軍の兵士たちはユダヤ人を手当たり次第に虐殺した。その後、数世紀の間に状況は幾分安定したが、ユダヤ人はキリスト教徒の職業ギルドに加入することを許されなかったために、彼らに唯一残された職業である金融業を営む他なかった。金融業は、神に禁じられた行為である高利貸しに手を染めることを恐れて、キリスト教徒が避けた職業である。当然、これによってキリスト教徒に対するユダヤ人のイメージは悪化したが、しかしまた、ユダヤ人は必要悪として認められることにもなった。ところが、13世紀後半、キリスト教徒による銀行制度がフィレンツェを皮切りに発足すると、ユダヤ人は存在価値を失ったとされ、それぞれの国から追放され始めた。まず、1306年にフランスから、次いでドイツの一部とイングランドから、また、1492年にはスペインから追放された。これにより彷徨えるユダヤ人の神話は更に一般的となった。中には門戸を再び開く国もあったが、その後何世紀にもわたってユダヤ人を受け入れない国もあった。スペインでは、ユダヤ人は暴力や国外追放の脅威によってキリスト教に改宗させられたが、その彼らも異端審問にかけられることとなった。そうした改宗者の中には、隠れてユダヤ教を信仰する者(「マラーノ(Maranos)」)もいた。スペインでは、「純血」という人種差別的な思想も発展し、何世代にもわたってキリスト教を信仰し続けたユダヤ人も、血が不純であるという理由で異端審問の標的にされた。西ヨーロッパ諸国から追放されたユダヤ人は、東へ向かうことを余儀なくされた。彼らはオスマン帝国、そしてついにはポーランドまで歩を進め、そこで東の間の安息を得たのである。

キリスト教世界となったヨーロッパで、ユダヤ人

たちは特別な印や衣類を身につけさせられた。それにより、ユダヤ人は肉体的に特異な存在であるとの言い伝えが生まれた。彼らは、角や尻尾といった悪魔の印を持つ者として描かれることもあった。14世紀に黒死病が大流行し、ヨーロッパ人口の三分の一近くが犠牲となったとき、ユダヤ人が井戸に毒を注いでこの病気をばら撒いたとされた。他にも、血の中傷と呼ばれる迫害も起こった。これは、ユダヤ人がキリスト教徒、特にその子供を殺害して血を奪い、それを使用して過ぎ越しの祭りのための種無しパンを焼いているという非難である。ユダヤ人が人間どころか動物の血さえも料理に使わないということは、ユダヤ教の基本を知る者にとって常識のはずである。しかし、この言い伝えは長年によって保持され、一部の地域では今なお生き残っているのである。

やがて宗教改革が起こったが、残念なことに、これによってもユダヤ人を取り巻く状況が改善されることはなかった。特にルター派の国々においてこの傾向は顕著であった。カルヴァンが比較的穏健な姿勢をとっていたのに対し、ルターは明確に反ユダヤ的な見解を口にしたのである。カルヴァン派の国々における状況は比較的ましであったが、とりわけドイツを始めとするルター派の国々においては、ユダヤ人は差別と迫害に苦しみ続けた。

18世紀に入ると、ヨーロッパにおける状況は啓蒙主義の影響で変わり始めた。モンテスキュー、レッシング、ルソーらは共通の人間性について語り、ユダヤ人にも等しい権利を認めるように訴えた。しかし、彼らがユダヤ人に関心に向けたのは、多くの場合、キリスト教への敵意からであった。彼らは合理主義と科学の重要性を訴え、全ての組織的な宗教を批判した。新ユダヤ的な啓蒙主義の作家も、ユダヤ人に対して伝統と習慣を捨てて、他の人々と同化するように説き続けた。そのようにして、ユダヤ人たちは同化することと引き換えに市民権を約束されたわけであるが、その約束も多



くの場合果たされることはなかったのである。

ユダヤ人の解放は、19世紀に入ってから徐々に起こり始めた。ここで言う解放とは、ユダヤ人に、それまで認められていなかった市民権を与えることである。そのプロセスは、国または街によって異なる時期に始まり、多くの障害にぶつかりながら長年にわたって続いた。それが最初に始まったのはフランス革命の後、ナポレオン戦争がヨーロッパ各地に広がってからである。ドイツの一部地域では、ユダヤ人に一旦与えられた権利が、1815年の王政復古を機に再び剥奪されるということも起こった。しかし、19世紀末までには、西ヨーロッパのほとんどの国において、ユダヤ人に平等な市民権が認められた。ただしドイツでは、幾つかの面において、ある程度の制限が課せられており、例えば、公の方針とは裏腹に、ユダヤ人は軍隊将校、大学教授、政府高官などの地位につくことができなかったのである。東ヨーロッパ、特にロシアでの境遇は更に厳しいものであった。

19世紀に、ユダヤ人の解放が進む一方で、旧来の反セム主義を土台とした新しい反セム主義が誕生した。その主張は、ユダヤ人は人間社会とは調和しない集団であるというものである。典型的「ユダヤ人」は、金儲けは上手いが、非民族的で生産力のない外国人だと見なされた。これは民族主義のイデオロギーが支配的な時代において好ましくない特徴だと考えられた。ユダヤ人が、それぞれの国に対する忠誠を示そうと勤め、兵士として戦場に赴き、時には他のユダヤ人を相手に戦ったにもかかわらず、ヨーロッパ各地に新たな民族国家、王国が誕生したときには、そこにユダヤ人の居場所はないとされた。彼らは、「真の」ドイツ人やフランス人とは認められなかったのである。このことは、ドレフス事件を通して一層明確になった。フランス軍最高司令部における唯一のユダヤ人である、アルフレッド・ドレフスが虚偽の証拠に基づいて反逆罪に問われたのである。この事件は、ユ

ダヤ人社会全体に対する挑戦として受け止められ、シオニズムの発展を促す要因となった。シオニズムとは、いずれの国においても平等な国民として認められないユダヤ人が真の自由を獲得するには、自分たちの国を建設する以外にないと主張する、ユダヤ復興運動である。

反セム主義における次の段階として、疑似科学的な論拠に基づく人種差別的な反セム主義が台頭した。これは19世紀後半から20世紀前半にかけて、イングランド、フランス、ドイツの著名人によって発展させられた。神学的な理論が力を失い、古めかしく感じられるようになる一方で、科学的説明が人間の生活のあらゆる面で一般化し始めた時代のことであった。人種的反セム主義を推し進めた人物のひとりに、アルチュール・ゴヴィノー伯爵がいる。彼は、セム人や他の「劣等人種」に対するアーリア人の優越性と、「アーリア人種」における「ゲルマン民族」の優越性を主張した。リヒャルト・ワーグナー(彼自身も人種差別的な反セム主義を促進した)の義理の息子であるヒューストン・スチュアート・チェンバレンもまた、著名な反セム主義者であった。彼は、ユダヤ人の存在そのものがドイツ社会を脅威に晒していると主張した。こうした思想はナチ政権下で完成し、人種差別的な法律となり、悲劇的な結果をもたらすこととなる。

「反セム主義」という言葉は1879年、ドイツ人のヴィルヘルム・マルによって考案されたものであるが、これは1900年までに国際的な運動へと発展し、国も目的も異なる多くの団体を結束させた。反セム議会が開催され、反セム文学が全てのヨーロッパ言語に翻訳されたうえ、他の地域にも進出し始めた。こうした書物の中で最も広く読まれたのは、ユダヤ人が世界征服を企んでいるという神話を発展させた、『シオンの長老たちの議定書(Protocols of the Elders of Zion)』である。これはフランス語の古い文献を土台にロシアの秘密警察が作り上げたものだと思われる。これもまた、

言い伝えが一定の人々に受け入れられると払拭できなくなるという現象の好例である。『議定書』は日本語にも翻訳された。1980年代から90年代にかけて日本で反響を呼んだ多くの反セム主義的な書籍にも、同書と類似した主張が見受けられる。

先述のように、反セム主義の最悪の表現とでも呼ぶべきものが、二つの世界大戦の間にドイツで起こった。これは民族主義、外国人嫌悪、人種差別が一体になったものである。第一次世界大戦中にユダヤ人がドイツ人を背後から刃物で襲っていたという噂が流れ、ユダヤ人は「バック・スタビング(backstabbing)」を行う民族だとされた。ドイツが戦争に勝っていないながら、降伏を余儀なくされたのは、それが原因だと言われた。ユダヤ教の悪魔的な力の観念と、疑似科学的な人種間が組み合わさった結果、史上類のない規模の人種的憎悪と大量虐殺が起こったのである。

反セム主義の歴史は長いが、それがホロコーストという悲惨な結果に至ったことは、確かに必然的であるとは言えない。第一次世界大戦後のヨーロッパにおける政治的、経済的状況が実際とは異なるものであったならば、ヒトラーとナチズムの台頭は生じなかったかもしれない。しかし、上記のような状況が、ヨーロッパにおけるナチズムとファシズムの一時的な勝利に至ると、それまで2000年間にわたって育まれてきた根深い反ユダヤ感情が、その暗黒の力を更に勢い付けさせることとなったのである。

イスラーム世界

歴史学的に検証することは難しいが、ユダヤ人とアラブ人が近似した出自を持つことは明らかである。両者の近接性は古代の神話からも窺い知ることができ、またヘブライ語とアラビア語の間には明白な類似性が認められる。しかし、残念なことに、しばしば隣人関係にも見られるように、何度か

の比較的平和な共存の時代もあったのではあるが、両者の間には強い敵対心が存在してきたのであり、未だに存在し続けている。

コーランにもユダヤ人を非難する記述が含まれている。しかし、ユダヤ人もキリスト教徒も「不信仰者」ではあるが「聖書の民」だとされている。両者には、被支配者と被保護者という両立場を組み合わせた特別な地位が与えられ、「ディンミー(dhimmi)」「被保護者」と呼ばれた。彼らは共通の納税義務を負わされ、色の異なる印の着用を義務付けられた。しかし、イスラーム世界の拡大に伴い、両者の違いは明確になっていった。イスラーム世界に組み込まれた国家の多くが、元来、キリスト教世界に属し、更にその多くがギリシア語圏であったことを考えると、この流れの中で、キリスト教的な反セム主義がムスリムの間に浸透した可能性も考えられる。9世紀の歴史家であるアル・タバリは、「キリスト教徒は、日夜ユダヤ人の粗捜しに勤しんでいる」と述べている。9世紀の著名なアラブ人作家であるアル・ジャーヒズは、ムスリムが、三位一体の神を信じ、しかも経済活動における強力なライバルであるキリスト教徒より、むしろユダヤ人に対して敵対的であることに驚きを示している。彼はこの不可解な現象に対する答えの一つとして、ユダヤ人がメディナ(Al-Medina)や他の土地においてムスリムと隣り合わせに暮らしていたということを挙げている。隣人に対する敵意は、親類に対するそれと同様に激しくなる傾向にある。彼によれば、人間は自分の知るもの、そして自分と似た者しか嫌うことができない。日常的に接していると、短所も目に付きやすくなるということである。

その一方で、ムスリムとユダヤ人はお互いに対して親近感を抱いていたと思われる。というのも、清めの儀式や食物規定に関する考え方、割礼の習慣などを共有していたからである。従って、キリスト教世界に見られるような、ユダヤ人を不浄と見なして忌み嫌うという傾向は、イスラーム世界に



おいてはそれほど強くなかったと思われる。また、ユダヤ人がキリスト教徒よりもムスリムによる統治を好んだことも明かである。例えば、ユダヤ人はムスリムによるパレスチナ、シリア、スペインの占領を積極的に支援した。更に、スペインでは、ユダヤ人とムスリムが哲学や文学において二つの文化を融合した、ユダヤ-イスラーム関係における「黄金時代」と呼ばれる時期もあった。そこで生まれた知識はキリスト教世界にも伝播し、ルネッサンスの到来を促したのである。

しかしながら、元来、ユダヤ人に対して寛容であったムスリムの態度も、時代、地域、支配的なイデオロギーの質などによって変化した。例えば、1697年にイエメンで、1839年にイランのメシェドで起こったようなユダヤ人に対する悪名高い迫害は、シーア派のムスリムによって企てられたものである。シリアがムハンマド・アリの支配下にあった1840年のダマスカス事件における血の中傷もよく知られている。イエメンにおいて、そしてモロッコでも、ユダヤ人はアラブ版のゲッターである「メッラーフ(mellah)」に押し込められた。また、ユダヤ人はムスリムのものよりも高い建物を所有することを禁じられ、動物に乗ることも許されなかった。

近代に入ると、ヨーロッパにおける反セム主義のプロパガンダの一部がアラブにも浸透した。これは、既に19世紀以降のことである。パレスチナを巡るユダヤ-アラブ間の紛争が勃発すると、アラブ人はユダヤ人を悪魔に例えるなど、反セム主義的な観念やイメージをプロパガンダに利用し始めた。アラブ諸国において、こうしたプロパガンダはしばしば政府の内部、または政府の支援するメディアから発信される。アラブの学校で使われる教科書には、『シオンの長老たちの議定書』を始めとする書物の内容が盛り込まれている。このようなプロパガンダは今日でも流布しており、アラブ世界のメディアとインターネットに広がっているのである。これがヨーロッパやその他の地域に住むムス

リムの反ユダヤ感情を煽っていることは間違いのないと思われる。

ヨーロッパにおける現状

第二次世界大戦以前、ヨーロッパには世界で最も多くのユダヤ人が暮らしていたが、その多くがホロコーストによって命を落とすこととなった。ホロコースト以前、世界には1千8百万人ものユダヤ人が存在したと推定される。しかし、対戦とナチによる虐殺を経て、その数は1千2百万人ほどに落ち込んだ。ユダヤ人人口はその後、約1千4百万人まで回復したが、異教徒との結婚や世俗化などによって、現在では急速に減少しつつある。現在、全世界におけるユダヤ人人口は、約1千3百万人(日本人口の約10パーセント)と推定される。このうち約6百万人が北米(米国とカナダ)で暮らし、世界最大のユダヤ人コミュニティを形成している。世界で二番目にユダヤ人が多いのはイスラエルであり、ここには5百万人弱が住んでいる。西ヨーロッパには約百万人のユダヤ人が暮らしており、国別ではフランス(60万人)、イギリス(30万人)、ドイツ(僅かに6万人)に集中している。東ヨーロッパでは、ロシア(55万人)とウクライナ(40万人)を中心に、百万人強のユダヤ人が暮らしている。アラブおよびイスラーム教国では、ごく少数がイラン(2万5千人)、モロッコ(7千5百人)、チュニジア(2千人)に住んでいるのみである。

ショッキングなことであるが、反セム主義的事件は、第二次世界大戦直後から深刻なものが起こり続けている。1946年、多数のユダヤ人がポーランドにおけるポグロムの犠牲となった。この年には、かつての血の中傷が再開されている。ソビエト連邦時代のロシアでは、反セム主義は法的には禁じられていたものの、国家権力による組織的な迫害が続けられた。反セム主義的事件は、かつてほど残酷な形ではないにせよ、過去50年間にわたっ

て起こり続けてきたのである。

一方、歓迎すべき動向としては、ユダヤ人に対するキリスト教団体の態度が大きく変わったことが挙げられる。ローマ法王ヨハネ23世が和解に向けた取り組みを開始し、第二バチカン公会議では、教義における重要な変更が採択された。イエス・キリストの処刑に対する永遠の罪を全てのユダヤ人から取り除いたのである(1965年、「我らの時代に(Nostra Aetate)」)。変化はまた、典礼(liturgy)においても見られた。ヨハネ・パウロ2世が、法王として始めてシナゴグを訪れ(1986年、ローマにて)、ユダヤ人をキリスト教徒の「兄」と呼んだのである。現在、ユダヤ人とキリスト教の各教派が協力して、教科書や典礼式文(liturgy)から反ユダヤ的な内容を削除する作業に取り組んでいる。しかしながら、こうした変化が人々の間に根付くまでには、更に長い時間が必要になると思われる。また、キリスト教が、かつてほどの権威——従来はユダヤ人にとって否定的なものであったが、現在では肯定的なものとも考えられる——を、もはや持っていないこと、また、その影響の及ぶ範囲も過去に比べてかなり狭まっていることも忘れてはならないだろう。

近年、反セム主義的事件の数に増加が見られ、この傾向は2004年においても続いた。米国国務省の最近の報告によると、ヨーロッパ12カ国でユダヤ人に対する身体的暴力が、30カ国でシナゴグやユダヤ人墓地への襲撃が、28カ国でユダヤ人に対する言葉の暴力が起こっている。以下に、その詳細を紹介する。

イギリス本国では77件の暴力事件を含む310件の事件が報告された。この数は、2003年(55件の暴力事件を含む163件)の約2倍である。これらの事件の多くがシナゴグの内部、または周辺で起こっている。放火未遂事件も少なくない。最近4年間で襲撃を受けたシナゴグは100棟に上る。

フランスでは、反セム主義的事件が一貫して増

え続けており、この傾向は2004年も変わることはなかった。ユダヤ人、イスラーム系移民とも、ヨーロッパで最大の人口が暮らすフランスでは、反セム主義的事件の数もヨーロッパ最大となっている。フランス政府による公式報告によると、2004年には970件のユダヤ人襲撃事件が起こり(2003年には601件)、その加害者の多くがアラブ人またはムスリムであった。被害に遭ったユダヤ人のうち、33名が負傷している(前年は22名)。一方でまた、ムスリムに対する襲撃事件も増加している。2003年には595件(その前年は232件)が起こり、その多くが極右団体に属する者による犯行であった。

ロシアとウクライナでは、2004年に295件の事件が起こり、そのうち110件が暴力事件であった。2003年の件数は、それぞれ146件と35件である。

米国国務省の報告によると、西ヨーロッパにおけるユダヤ人襲撃事件のほとんどが「経済的に貧しく、不満を抱えたムスリムの若者」によって引き起こされたものであり、その件数は極右勢力による犯行件数を上回っている。一方、中欧、東ヨーロッパ、ロシアにおいては、スキンヘッド、国粋主義者などの極右勢力が主な加害者となっている。

ここでロシアでの一例を紹介したい。今年の1月に、学者、新聞編集者たち500名によって署名された長い手紙が、サンクト・ペテルブルグの新聞に掲載された。その内容は、ユダヤ人団体はロシアと世界にとって危険な存在であるため、ロシア政府はそれらに対する支援を中止すべきであると訴えるものであった。手紙の執筆者は血の中傷において使われた非難を再び持ち出し、ユダヤ人が儀式においてキリスト教徒を殺害していたことはロシアの法廷で立証されている、と主張した。ロシア議会のメンバー19名もこれに署名したが、後に撤回している。これは、古い形の反セム主義も未だ根強く残っていることを示す一例である。

比較的新しい反セム主義としては、ホロコーストの否定が挙げられる。これもまた、イスラーム系と

極右系の両勢力によって行われるものである。もう一つの問題は無知である。2004年にBBCが行った調査では、イギリス人口の45パーセント、同国の35歳未満人口の60パーセントが、アウシュビッツについて聞いたことがないと回答している。

2003年、EUは「ヨーロッパ連合における反セム主義の兆候 (Manifestations of anti-Semitism in the European Union)」という特別報告書を作成した。内容が公開されたのは2004年である。公開を抑える動きがあるのではないかと、との批判が持ち上がってからである。報告書は100ページにわたり、その内容は、2000年以降、反セム主義的事件が明確な増加傾向にあること明らかにしている。報告書は、各国の政治的指導者に対し、教育や法律による事件の抑制に向けた積極的な取り組みを促したことで、一定の成果を上げている。

実際に、ヨーロッパの指導者たちは、反セム主義の抑制に向けた真剣な取り組みを重ねており、彼らの多くが2005年1月25日、ベルリンで開催されたアウシュビッツ解放60周年記念式典に出席したのである。ドイツのゲルハルト・シュミット首相はスピーチの中で次のように述べた。「反セム主義が今なお存在するのは厳然たる事実です。そして、反セム主義と戦うことは、我々の社会全体の使命です。」

国連総会で初めてホロコースト記念式典が開催されたことにも触れておくべきであろう。これもまた、アウシュビッツ解放60周年を機に開催されたものである。ノーベル賞受賞作家のエリー・ヴィーゼルがスピーチを行い、次のように述べている。「私を含め、生き残ったユダヤ人が自ら受けた苦しみについて語るとき、彼らはそこに警告の意味を込めています。このような悲劇が他の人々の身にも及ばないようにと、警鐘を鳴らしているのです。実際、世界の人々が私たちの言葉に耳を傾けていたならば、ダルフル、カンボジア、ボスニア、ルワンダの悲劇は起こらなかったはずだと、私は確

信しています。」そして、次のように締めくくっている。「世界はいつになったら学ぶのでしょうか。」

我々が現在直面している最大の問題は、タームに関する議論、つまり原則に関する議論である。すなわち、反セム主義、反シオニズム、純粋に政治的な反イスラエルの立場は、区別できるのか、という問題である。ヨーロッパの、特に左派の知識人たちは、ユダヤ人から反セム主義者呼ばわりされるのを恐れて、イスラエル批判を控えざるをえなくなったと嘆いている。確かに、ユダヤ人指導者の中には、イスラエル批判に反論する中で行き過ぎた発言をする者もいた。しかしまた一方で、イスラエルに対する政治的な批判の中に、純粋に反セム主義的な主張が隠されていることもある。どこでこれらを線引きできるのであろうか。これは非常に難しい問題である。ケース・バイ・ケースで慎重に検討する他はないであろう。しかし、私見では、人種差別的な表現を避け、暴力の扇動やテロリズムの支持をせず、ナチに類似した表現を避ける限り、イスラエル批判は差し支えないと思われる。これについては、以下に詳細を論じる。

独立後の数年間、イスラエルは西ヨーロッパの左派と右派の両者に支持された。しかし、1967年を境に、特に左派の間で状況は徐々に変わっていった。イスラエルは加害者と見なされるようになったのである。キリスト教徒の間でも、アラブ人対して傲慢で残忍なユダヤ人というイメージが確立した。

こうした傾向は、2001年9月を境に一段と明確なものになっている。ドイツのディ・ヴェルト紙の国際記事編集者、ジャック・シュスターによれば、現在ユダヤ人に向けられた怒りは人種差別的なものではなく、イスラエルと関係する全てのものの拒絶として現れている。つまり、ユダヤ人はイスラエルと同一視されているのである。このことは、ユダヤ人がヨーロッパ社会に完全には受け入れられていないということを表している。彼によれば、ヨーロッパにおいてイスラエルが独占的な侵略者と見な

され、ヨーロッパの人々が、イスラエルが常にテロの脅威に晒されていることから目を逸らしているという事実は、その背後に、数十年間に及ぶ罪悪感から逃れたいという願望を明らかにしている。

ここで注意すべき点は、全てのユダヤ人がイスラエルを故郷と見なし、その行動に共感しているわけではないということである。イスラエルの行動をきっかけにユダヤ人が無差別攻撃される事実は、人種的憎悪が未だに深刻な問題であることを明らかにしている。

2003年にEU圏内で行われた世論調査では、多くの人々がイスラエルを世界平和への最大の脅威と思っていることが明らかになった(別表に米国で行われた同様の調査の結果を掲載。2005年2月2日付けワシントン・ポスト紙掲載の、ロビン・シェファードによるデータと記事より)。ヨーロッパでは、イスラエル-パレスチナ関係の行き詰まりこそが世界の諸問題の根源であり、その責任はイスラエルとその同盟国である米国にあると考える人の数が増加している。

イギリスの有名誌エコノミストに最近掲載された、「ヨーロッパの反セム主義：常に存在しているのか? (Anti-Semitism in Europe: Always with us?)」という記事において、ヨーロッパ在住のユダヤ人数名がインタビューに答え、彼らの生活は概ね安全であり、特に身の危険を感じるようなこともないと語っている。しかし、この状況も変わりつつあると著者は語る。「大戦後、イスラエルおよびユダヤ人全般について否定的に語ることはタブー視されてきたが、ドイツを始めとする国では、それが変わりつつあるように見える。反ユダヤ的な発言が社会的に許容される風潮が高まりつつあるのではないかと危惧する声もある。ヨーロッパ全域で、反イスラエル(より具体的には反アリエル・シャロン)感情が高まっているが、これを反セム主義と見分けることは、多くの場合困難である。イスラエル批判が、反セム主義の正当化に使われる場合も

あるからだ」。

したがって、旧来の反セム主義の兆候とは別に、最近のヨーロッパにおけるユダヤ人襲撃事件は、中東の政治情勢やヨーロッパにおける過激派イスラーム団体の活動と関連したものと考えられる。後者のことは特に残念である。ユダヤ人とムスリムは、人種的憎悪、同化、宗教的慣習の維持など、多くの問題を共有しているからである。両者がお互いに対する敵意を払拭し、共通の懸案事項に一致して取り組めば、それは両者に大きな利益をもたらすことになるだろう。しかし、そこに至るための道程は険しい。

2005年1月26日付けのロイター通信によれば、イギリスのイスラーム指導者たちは、同国政府主催によるアウシュビッツ解放60周年記念式典への参加を見合わせたとのことである。現地のムスリム議会(Muslim Council)は、記念式典を開くならば、それはボスニア、ルワンダ、パレスチナなどの、世界で起こった全ての大量虐殺事件に捧げられたものとなるべきである、という声明を発表した。

また、ロイターのレポーター、トム・ヘネガンの報告(2005年1月21日)によると、反セム主義はフランスの、特にムスリムの生徒が多い学校で盛んである。クラスメートを「汚いユダヤ人」と罵ったり、教師に「ユダヤ人は金と権力にしか興味がない」と訴えたり、校内の壁に「ユダヤ人は死ね」と落書きするなどの行動が見られるのである。また、フランス政府がホロコーストに関する学習プログラムを作成したが、ムスリムの生徒の多くはそれを学ぶことを拒否しており、中にはヒトラーを賞賛するものもあるという。

しかし、最近ワシントン・ポスト紙に掲載されたグレン・フランクルの記事(2005年2月23日)にも示されている通り、諦める必要はないだろう。その記事は、人口80万人のうち、ムスリムが20万人、ユダヤ人が8万人に上る地中海沿岸の湾岸都市マルセイユの状況を紹介したものである。2001年にはユ



ダヤ系の学校が燃やされるなど、街では衝突が頻発していた。しかし、双方の指導者たちは、お互いのコミュニティのために協力し合うことを学んだ。その結果、現在でも事件は起こっているが、その頻度は想定されたものに比べて遥かに低いものとなっている。ムスリムの墓地が荒らされるという事件も起こったが、修復が済むと、ムスリムの指導者はその記念式典にユダヤ教の指導者を招いている。ユダヤ教の指導者はスピーチの中で、今回の事件に際しては自分たちの墓が穢されたのと同じような痛みと悔しさを感じていると述べた。ヒレール・レヴィン教授も、最近のCISMOR会議において、フランス政府がムスリム女性にヒジャブの着用を禁じたことを批判しながら、同様の気持ちを表している（『一神教聖職者交流会議（Religious Leader's Conference on Monotheistic Religions 2004）』, 120頁を参照のこと）。

以上の例は、友好的な姿勢があれば、敵意を乗り越えて相互に尊敬し合う関係に至ることも可能であることを明らかにしている。そのためには、賢明で寛容な指導者が優れたリーダーシップを発揮し、それぞれのコミュニティを建設的な方向へと導くことが必要である。真の利益をもたらすのは対立ではなく、協力であるという理解が人々の間に広まれば、多くの苦しみを知る地にも、新たな平和的共存の時代が訪れるであろう。

別表：世論調査の結果

これらの調査は2003年に、まず当時EUに加盟していた15カ国で、次いでアメリカ合衆国で行われた。いずれの調査においても、質問の内容は次の通りであった。「次に挙げる国について、世界へ違和にとって脅威だと思われるものと、思われな

いものを、あなた自身の考えに基づいて選んでください」。各国について、「脅威になる」と回答した人々の割合：

	EU	USA
Israel	59%	43%
USA	53%	37%
North Korea	53%	77%
Iran	53%	76%
Iraq	52%	76%
Afghanistan	50%	65%
Pakistan	48%	57%
Syria	37%	61%
Saudi Arabia	36%	62%
Libya	36%	52%
China	30%	54%
India	22%	29%
Russia	21%	28%
Somalia	16%	25%

**CISMOR Special Project "Religious Policy in Europe"- 2nd Seminar meeting
March 3, 2005**

Anti-Semitism: Some historical background and the current situation in Europe

Doron B. Cohen

Anti-Semitism is a modern term, but an old phenomenon, of hatred towards the Jews, which is more than the “normal” hatred of one people to another, but based on theological or racial arguments, with the purpose of finding a good excuse for denying the civil rights of the Jews, and even their right to exist. In the following I shall give a short historical review of the phenomenon, with just a few examples, and then a review of the situation in Europe today, also with some examples. The outline of the lecture is as follows:

In Ancient Times

Hellenism: Jews are an isolated people
The Seleucid king Antiochus Epiphanes (175-164) attack on Jewish religion
Legend of expulsion of Jews from Egypt as lepers; misanthropic religion
Roman period – rights and wars; human sacrifice; destruction of Temple as God's punishment
Gnosticism - Judaism as the primarily source of evil

The Christian World

Christianity found Judaism completely intolerable; Jews are hated by God
The Gospels, the Church Fathers, the humiliated Jews as witnesses
The Crusades, the blood libel, the Wandering Jew, the devil-like Jew
Expulsion and inquisitions; “purity of blood” in Spain
The reformation – Luther, Calvin
The Enlightenment – 18th century – Montesquieu, Lessing, Rousseau - common humanity
The Emancipation – 19th century – a long process, different in every country
The new anti-Semitism – a term coined in 1879 by the German Wilhelm Marr